

【講演 8】房総における中期末葉から後期初頭の土器様相

小澤政彦

本発表では、房総における縄文時代中期末葉から後期初頭の土器様相を、加曽利E式土器を中心に検討した。この時期の関東地方では遺跡数の激減や「環状集落」の終焉といった、大きな社会的な変化が起こったと考えられており、当該期にかかわる社会様相や文化様相の変化について概観した。そして千葉県の様相についても先行研究を基に提示した。

次に、関東地方における中期末葉から後期初頭の考え方についてと題し、中期末葉から後期初頭の土器様相の研究史を扱った。またその際には、山内清男の研究によって整備された土器型式といった概念を説明し、中期や後期といった大別の考え方についても触れた。山内は、土器の顔つきの違いや層位資料を基に型式を設定していき、それを機械的にまとめる形で大別を設定していることから、大別は、絶対的な時間幅によって分けられたものでも、文化や社会の様相を反映して設定されたものでもないことを改めて確認した。関東地方の中期末葉から後期初頭の研究史に触れるにあたっては、称名寺式土器の研究史を中心に説明した。称名寺式設定以前、称名寺式貝塚出土の土器を基に称名寺式の設定と、その型式としての独立が疑われる時期、称名寺式の編年が確立する時期、近年の動向と4時期に分けて説明した。研究史を概観すると、称名寺式は加曽利E式と伴って出土することが多く、称名寺式成立後にも加曽利E式が残存している点、称名寺式の変遷にその加曽利E式土器が大きな影響を与えている点が、研究者の間で共通認識として定着していったことを示した。

関東地方の研究史をまとめたうえで、中期と後期の大別の捉え方について、近畿、東海地方と南東北地方の土器研究を簡潔にまとめ、検討を行った。近畿、東海地方では、称名寺式成立に大きな影響を与えた中津式の成立をもって後期とされており、関東地方と大きな隔たりはないと捉えられる。しかし当地域では、中期末葉の北白川C式土器と後期初頭の中津式への変化が漸移的であり、どちらの型式に含めるべきか苦慮する個体が存在するなど、課題も多い。関東では、称名寺式の古い段階は加曽利E式が主体であり、称名寺式古段階の終わりごろに逆転するという現象が認められることから、この段階から後期初頭となるという考え方も紹介した。南東北地方では、称名寺式成立期の土器は出土せず、称名寺式の成立期が捉えられない地域である。称名寺式は古段階の終わりから中段階にかけて認められるようになるが、出土量は少なく、中期末葉からの大木10式が広く分布している。これに加え、大木10式の範囲が研究者間で異なるという現状があることを確認した。こうした各地の状況を踏まえ、中期と後期の大別の境界がどのように考えられているかをまとめた。結論として中期と後期の大別の境界は各地で統一的に捉えていくのは困難であると同時に各地の土器研究についても様々な課題があるとまとめた。

次に房総における中期末葉から後期初頭の土器様相について検討した。加曽利E式終末の特徴は先行研究により指摘されており、その内容をまとめ、房総から出土した資料で説明を行った。この内容を踏まえて、称名寺式の7細別の段階編年を時間軸として用いて、各段階における住居跡出土資料で様相の検討を行った。検討の結果、この時期においても加曽利E式の中で地域差があることを指摘した。特に「併行垂下文類型」とされる土器がほとんど出土しない点、称名寺式と加曽利E式の折衷土器と考えられる「関沢類型」も出土量が限られる点は、房総におけるこの時期の特徴として注目される。また称名寺式第1・2段

階では、加曽利E式が主体的に出土し、称名寺式は客体的な存在であるのに対し、第3段階以降では称名寺式が主体となり、称名寺式第4段階には、加曽利E式土器は認められなくなる。その後、称名寺式第6段階に再び加曽利E式が出土するようになるが、在地での変遷は追えないことから、他地域で変遷した土器が再び認められると評価した。称名寺式第7段階では、東北地方の影響が強い土器が認められるようになるということを示した。

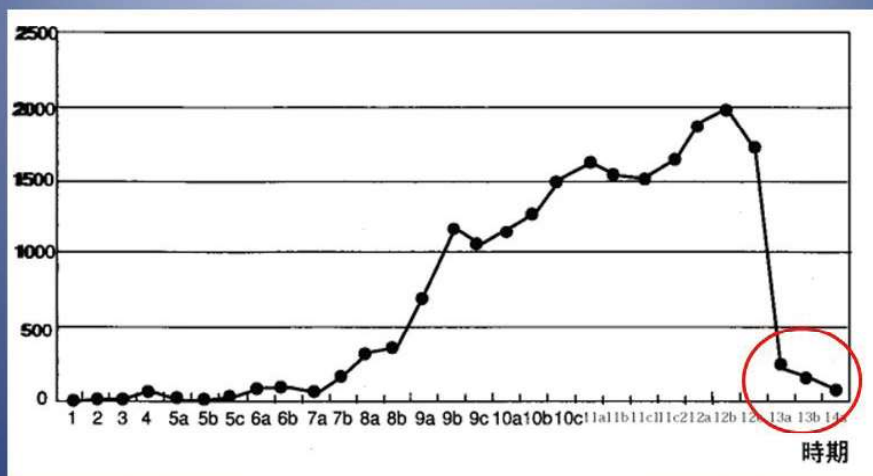
こうした地域差があることを説明し、房総における地域的特徴を示した。今後、他地域との関わりも含め、更に検討を進めていく必要があるとまとめた。

房総における中期末葉から後期 初頭の土器様相

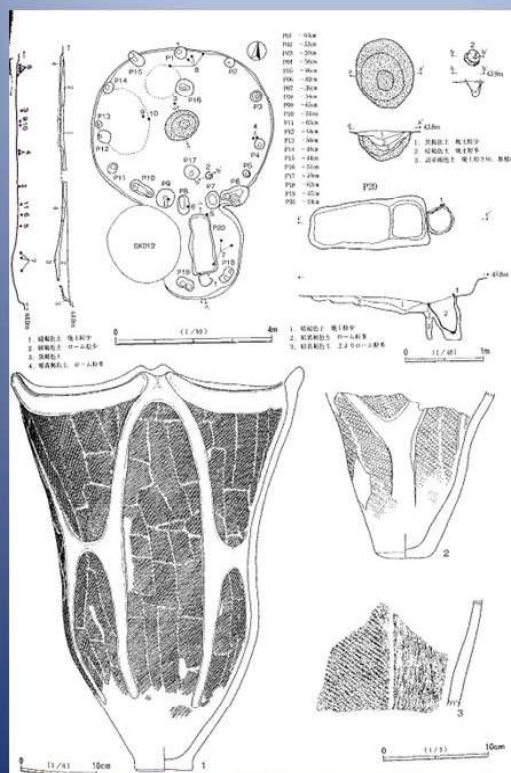
千葉県教育振興財団文化財セン
ター
小澤政彦

はじめに

- 関東地方では縄文時代中期末から後期初頭において大きな社会変化
 - 中期後葉に構築された環状集落が終焉し、「非居住域への分散居住」(加納2002)へと変化
 - 武蔵野・多摩地域における研究(小林2004)
 - 4.3Kaイベント
- 柄鏡形住居とよばれる特徴的な住居跡
- 土偶が出土しない



武蔵野台地東部域の人口増減(小林2004より一部改変)



千葉市六通貝塚SI-005

(1) 関東地方における中期末葉から後期初頭の考え方について

- 土器型式編年研究と研究史の概観

山内清男による土器編年研究

- 縄文土器の顔つきの違いと出土層位の検討から、時期、地域の単位として「土器型式」を設定していった。
- 設定した土器型式を機械的にまとめ、大別5期を設定(のちに草創期を追加)

縄紋土器型式の大別								
	渡島	陸奥	陸前	關東	信濃	東海	畿内	吉備
早期	住吉	(+)	槻木 1 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? × (+)	ひじ山 粕畑		黒島 ×
前期	石川野 × (+)	圓筒土器 下層式 (4 型式以上)	室濱 大木 1 2 a,b 3-5 6	蓮田 { 花袋下 關山 式 黒濱 諸磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 跡場	銚ノ木 ×	國府北白川 1 大蔵山	磯ノ森 里木 1
中期	(+) (+)	圓筒上 a b (+) (+)	大木 7a 7b 8 a,b 9, 10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E (新)	(+) (+) (+) (+)			里木 2
後期	青柳町 × (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B " 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層
晚期	(+)	龜ヶ 岡式 (+) (+) (+)	大洞 B " B-C " C1, 3 " A, A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) 佐野 ×	吉胡 × " × 保美 ×	宮瀧 × 日下 × 竹ノ内 × 宮瀧 ×	津雲下層

註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

(山内1937→1974)

称名寺式土器の設定

- 1950年代に発掘調査された神奈川県横浜市称名寺貝塚から出土した一群の土器を基に設定された。



(1、2 称名寺式第一群土器、3～5 称名寺式第二群土器)

称名寺貝塚出土の土器(吉田1960)

設定から1970年代まで

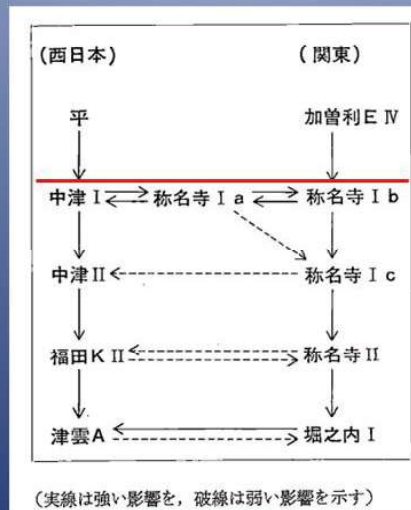
- 資料蓄積がなかなか進まない中で、型式としての独立性が疑われた(金子ほか1958、安孫子1971、柿沼1973など)。
- これは資料も少ない中で、加曽利E 式に伴って出土する点などから、独自の時間幅を持たないと考えられたためである。
- 山内は、1969年に示した編年案に称名寺式を後期初頭に置いている(山内1969→1974)。

推定年代	期	器(器名・式)	中国文化
C. 2500 B. C.	草創期 Jomon I	大 1 総 横 文 谷 2 残 縄 紋 寺 3 斜 縄 紋 弁草・大丸 夏 島 順向台 花輪台・大浦山	彩 陶
C. 2100 B. C.	早 期 Jomon II	雷門寺式地持式群 三戸式 田戸式 1, 2 子母口式 茅山式 1, 2, 3, 4	黒 陶
C. 1700 B. C.	前 期 Jomon III	花垣下瀬式 深山式 黒部式 縄張式 a, b, c 十三番提	原 史 時 代
C. 1300 B. C.	中 期 Jomon IV	五稜台 阿玉台・勝原 加曽利E 1, 2, 3, 4	鼓
C. 900 B. C.	後 期 Jomon V	称名寺 堀之内 1, 2 加曽利B 1, 2, 3 賀 谷 安 行 1, 2	周
C. 500 B. C.	晩 期 Jomon VI	安行 3 a, b, c, d 千瀬/荒海 荒海/女方	畿 内
C. 100 B. C.			

(山内1969→1974)

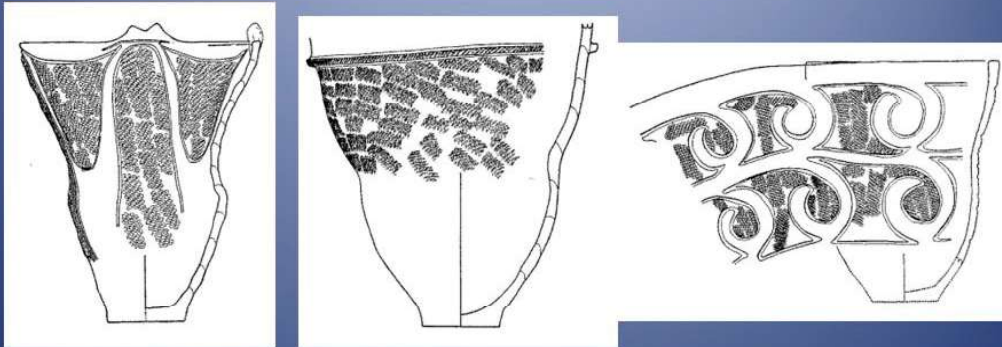
1970年代の研究(称名寺式土器編年の確立)

- ・ 今村啓爾の研究(今村1977)



称名寺式成立後にも残存する加曾利E式土器

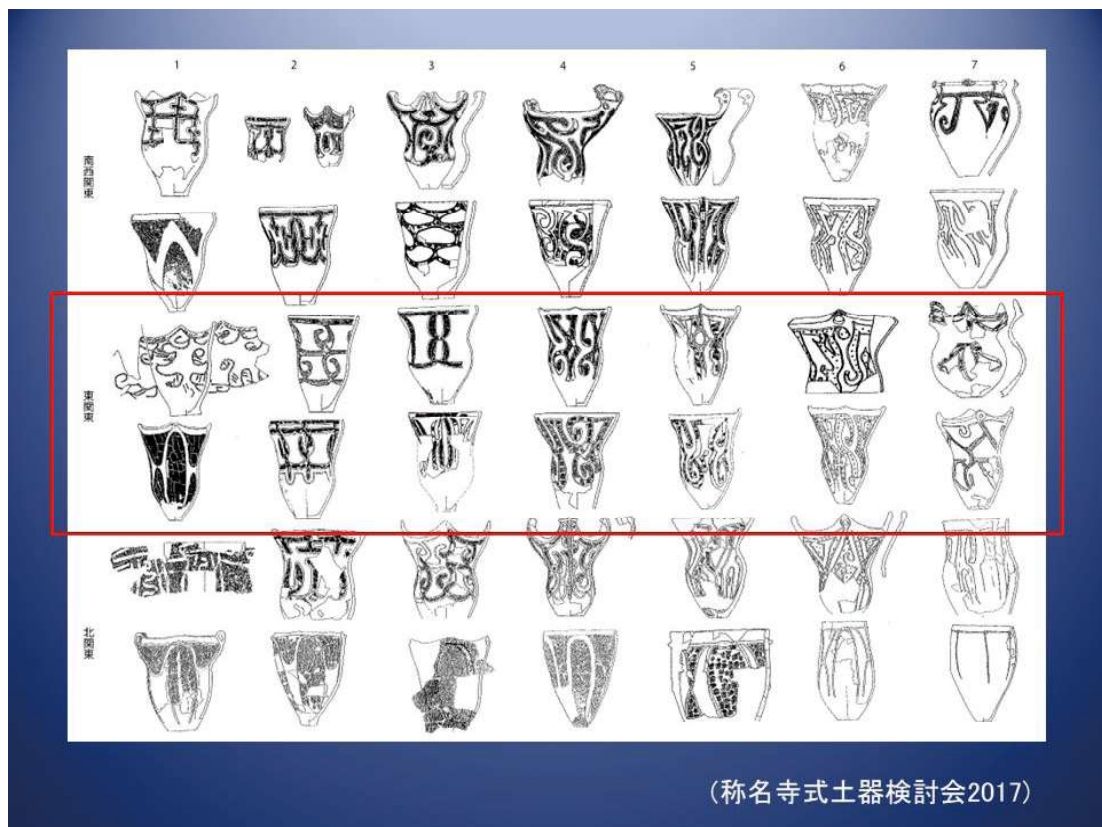
- ・ 今村は、その後の研究で加曾利E式が存続していることを認め、「続加曾利E式」と呼称することを提案した(今村1981)。
- ・ 笹森健一は、志久遺跡8号住居から出土した称名寺式土器と加曾利E式土器を検討する中で、器形や成形技法に注目しつつ加曾利E IV式の文様が施されている土器が、称名寺式の成形技法で製作されている指摘した(笹森1976)



埼玉県志久遺跡8号住居出土土器

称名寺式土器の交流研究会から現在まで

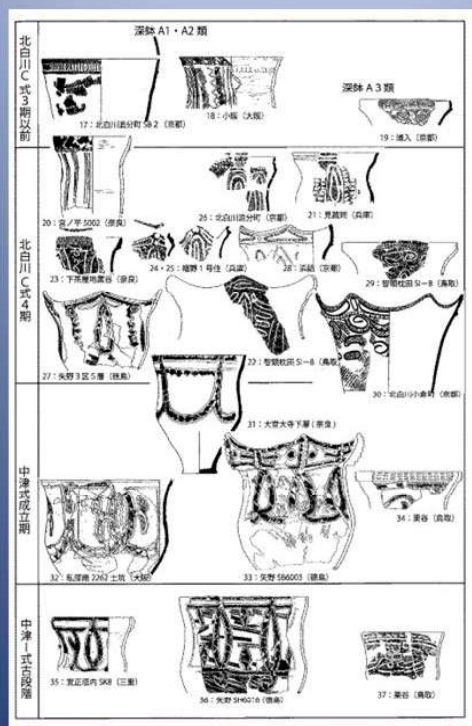
- 7細分の編年案が提示される(鈴木1990a、b、石井1992、鈴木2007、称名寺式土器検討会2017)。
- 稲村晃嗣は称名寺式成立後にも残存する加曽利E式について、型式学的検討を行った。
- その後資料蓄積と共に、地域的な検討も進められていった。



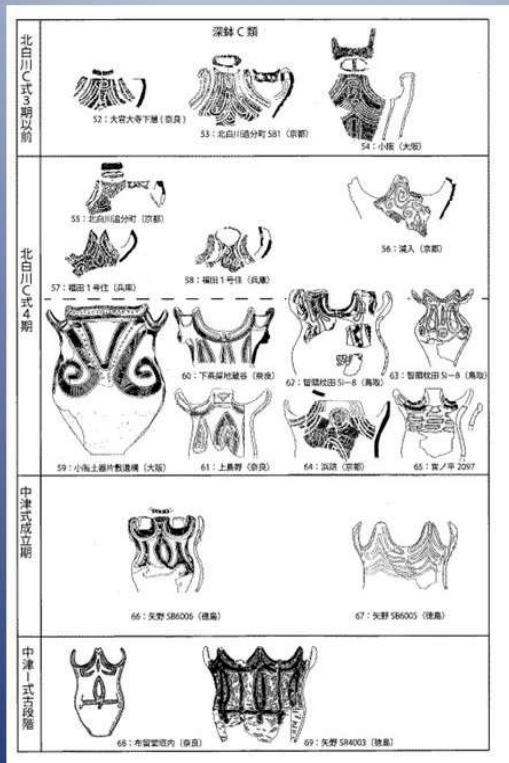
(2) 関東地方及び周辺地域の中期末葉から後期初頭の捉え方について

① 近畿・東海地方

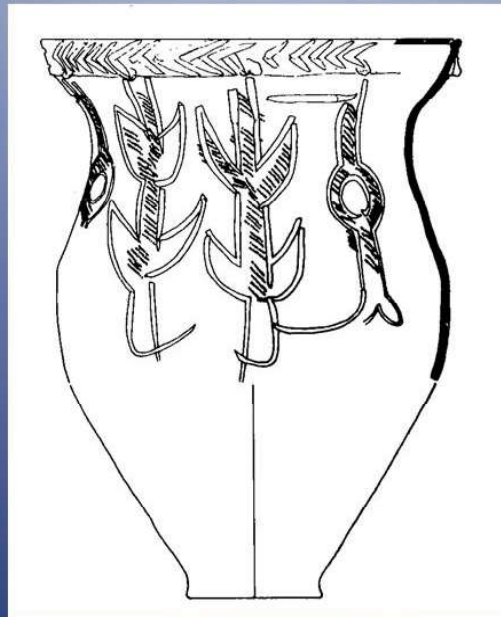
- ・ 近畿地方から東海地方では、中期末葉の土器が北白川C式、後期初頭の土器が中津式とされており、磨消縄文の成立をもって中津式の成立と考えられている（玉田1990、鶴飼2016、石田2016など）
- ・ 近畿地方ではその変化は漸移的であり、個体資料を見ていくと、判別が難しい土器も存在する。
- ・ 加納実は、北白川C式から中津式への変化について、すべての北白川C式の類型が中津式へ変化するのか（一部の土器が、磨消縄文を持たず中期と同じ顔つきで後期まで残存してしまったり、形骸化、粗製土器に転化してしまう可能性もある）という問題提起を行っている（加納2012、2013など）。これについては当該地域で、未だに解決できていない重要な課題である。



深鉢A類の編年(石田2016)



深鉢C類の編年(石田2016)

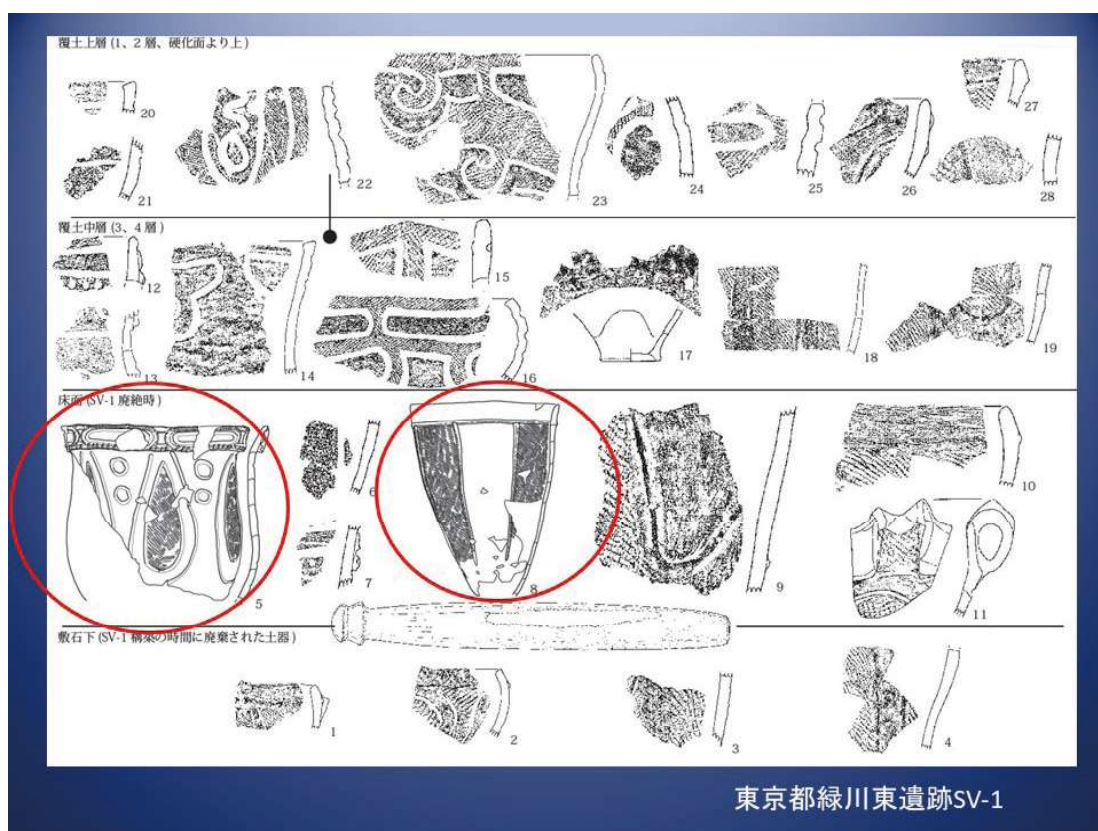


大官大寺下層

(2) 関東地方及び周辺地域の中期末葉から後期初頭の捉え方について

② 関東地方

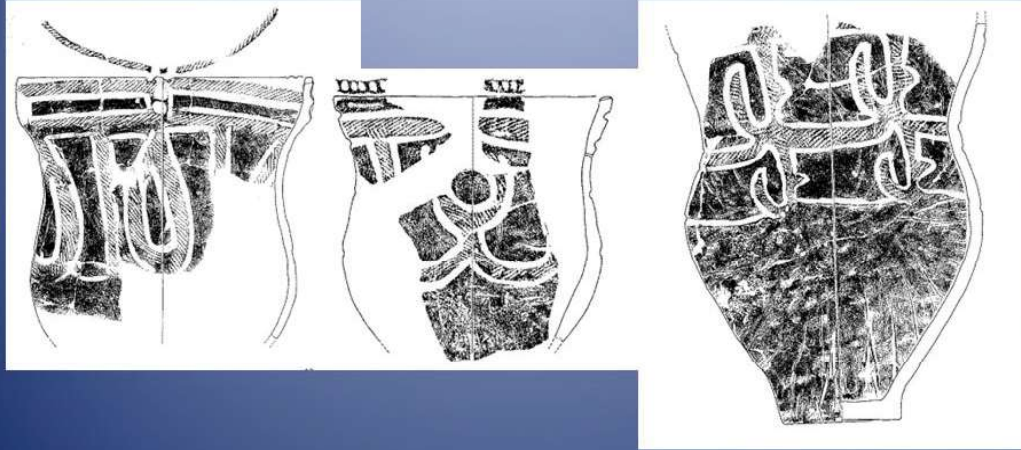
- 関東地方においては、上述のように中期に加曽利E式土器、後期に称名寺式土器が設定され、研究が行われてきた。
- 称名寺式古段階(第1、2段階)に伴う加曽利E式は、中期末の加曽利E4式の様相が強く、称名寺式に伴うものとの弁別が困難なものも存在する。



(2) 関東地方及び周辺地域の中期末葉から後期初頭の捉え方について

- 称名寺式第1、2段階を中期末に含めて考え、第3段階以降を後期初頭と捉える考え方もできる。
- 緑川東遺跡で出土した称名寺式第1段階の土器付着炭化物の較正年代は、小林謙一が従来縄文時代中期末としていた年代であった(小林ほか2014)
- 西日本系土器の東進とその影響が強い土器が製作される段階を中期末として捉えることは可能であり、この立場は石井も認めるところである(石井1992)。





横浜市松風台遺跡JT-3

(2) 関東地方及び周辺地域の中期末葉から後期初頭の捉え方について

③南東北地方

- 中期末葉の土器型式として大木10式が設定されている。南東北地方にあたる福島県では称名寺式が出土するが中段階以降のものが多く、古段階のものはほとんど出土しない。
- 相原淳一は、大木10式を後期初頭に位置づける見解に対し、土器型式の認定自体に問題があるとしている(相原2009)。研究者間の大木10式の範疇が異なることから、中期と後期の土器の位置づけにズレが生じていると考えられる。

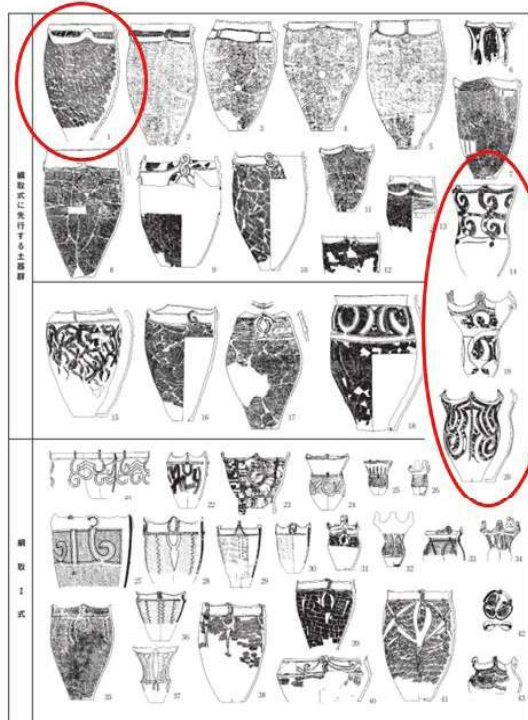


図2 縄文式成立期の編年模式図
1～6・9～14・18・22・29～41: 縄文式 (編年) 7・8・27・28・35・36・37: 縄文式 (編年) 23・24・25・26・32・33・34・38・39・42: 大塚 (編年) 20: 縄文式 (編年) 21: 縄文式 (編年) 31: 縄文式 (編年) 40: 縄文式 (編年) 43: 縄文式 (編年)

本間宏2008「南境式・縄取式」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

(4) 中期と後期の大別の境の問題 (2) (帯縄文の成立をもって後期とする場合)

近畿・東海	関東		南東北
北白川 C 式	加曾利 E4 式		
中津 I 式	加曾利 EV 式	称名寺式古段階	大木 10 式
中津 II 式		称名寺式中段階	未命名 牛蛭式?
福田 K II 式		称名寺式新段階	縄取 I 式
	堀之内 I 式		縄取 II 式

(4) 中期と後期の大別の境の問題

(2) (大木10式の終焉をもって中期末葉とする場合)

近畿・東海	関東		南東北
北白川 C 式	加曾利 E4 式		大木 10 式
中津 I 式		称名寺式古段階	
中津 II 式	加曾利 EV 式	称名寺式中段階	未命名 牛蛭式？
福田 K II 式		称名寺式新段階	綱取 I 式
	堀之内 I 式		綱取 II 式

(4) 中期と後期の大別の境の問題

(2) (綱取式の成立をもって後期初頭とする場合)

近畿・東海	関東		南東北
北白川 C 式	加曾利 E4 式		大木 10 式
中津 I 式	加曾利 EV 式	称名寺式古段階	
中津 II 式		称名寺式中段階	未命名 牛蛭式？
福田 K II 式		称名寺式新段階	綱取 I 式
	堀之内 I 式		綱取 II 式

2 房総における中期末葉から後期初頭の土器様相



(1) 加曽利E式終末の特徴について

- ① 胴上部と胴下部の文様が分帯され2帯化する「胴部文様の上下2帯化」が認められるものが出現する。関沢類型もこの変化の概念に含まれるものである。

関沢類型

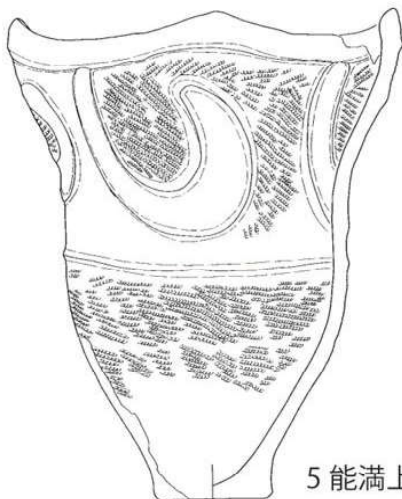
- 関沢第2地点出土の土器を指標とした加曽利E式との関連を示す土器



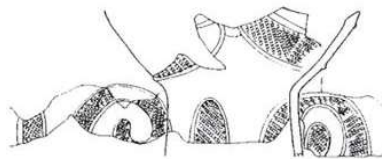
口縁が4単位の波状口縁

波長部に特有の貼付文

胴上部で横長のU字文、
胴下部は無文の渦巻き文



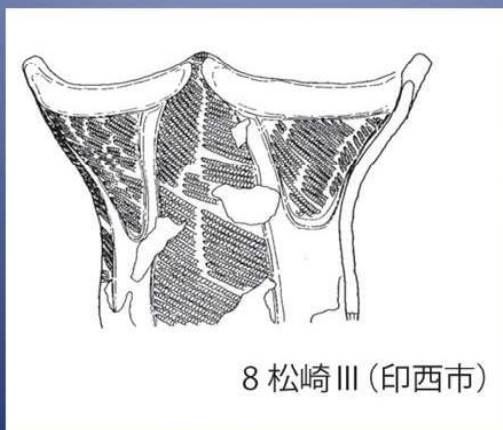
5 能満上小（市原市）



6 坂野台（松戸市）

(1)加曽利E式終末の特徴について

- ②器面を区画するように縦位の単位文や区画文を持つ傾向が認められる



8 松崎Ⅲ (印西市)

(1)加曽利E式終末の特徴について

- ③文様の一部を帯縄文で表現するものが出現する



7 一ノ谷西 (松戸市)

(1) 加曽利E式終末の特徴について

- ④加曽利E4式では、開放されていた文様の下端部を横位に連繋するようになる「下部文様連繋」をもつものが現れる(第4図10)。横位連繋は称名寺式または東北地方大木式の影響と考えられる。





(1) 加曾利E式終末の特徴について

- ⑥ 対向U字交錯文類型の胴部文様が口縁部を区画する横位の文様に接触する、もしくは口縁端部まで突き抜けるようになる。また隆線で施文されるものには接触した部分は突起状になることがある。



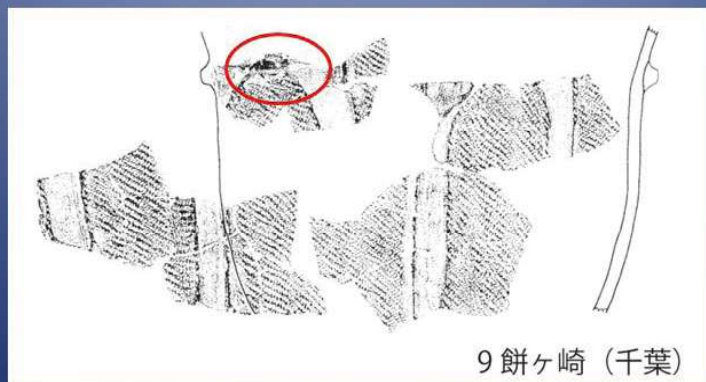
(1) 加曽利E式終末の特徴について

- ⑦「対向U字交錯文類型」が上下で対向する部分にずれが生じてくる。



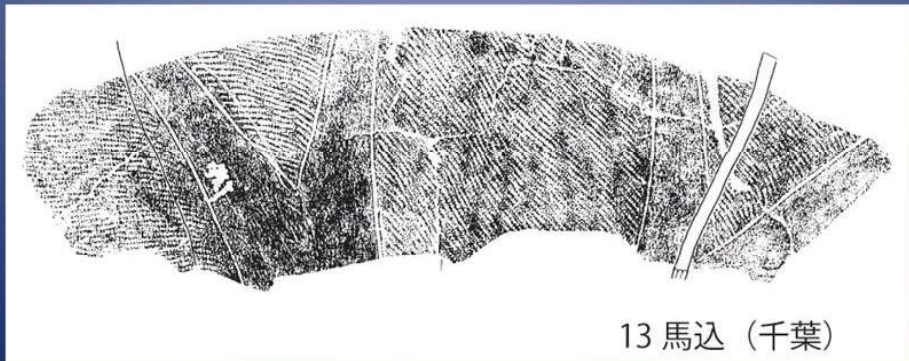
(1) 加曽利E式終末の特徴について

- ⑧対向U字文の部分が、胴中部で接触しX字状になる。連結した部分は突起状になることがある。



(1)加曽利E式終末の特徴について

- ⑨沈線で文様が施されるものは、沈線幅が細くなる傾向がある(第4図13)。



(1)加曽利E式終末の特徴について

- ⑩隆線貼り付け後に縄文を施文するのが特徴であるが、縄文施文後に隆線脇や隆線上をナデ消さない傾向がある。



(1) 加曽利E式終末の特徴について

- ⑪文様構成に乱れが認められることが多い
(U字文の区画が乱れる、一個体の中でU字文同士の大きさが異なるなど)



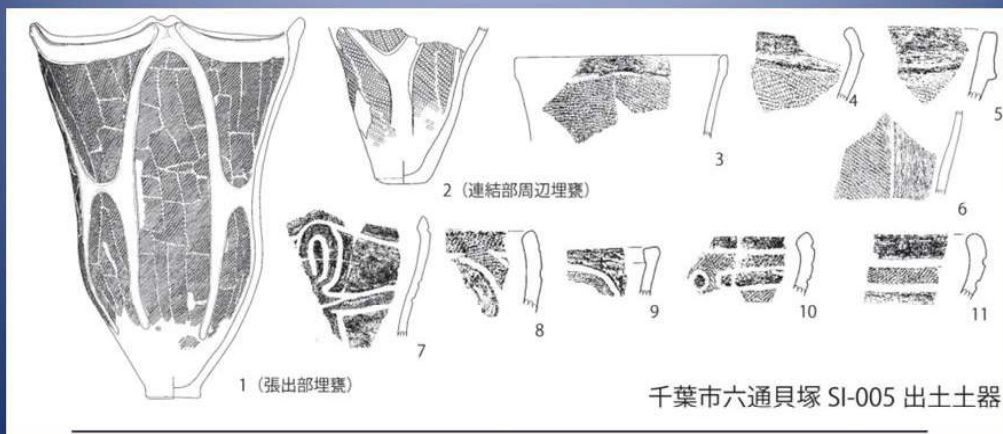
(2) 房総における中期末葉から後期初頭の土器様相

- 加曽利E式成立当初に認められた地域差は、時期が下るにつれて解消されていく方向に向かう。しかしこの時期においても、地域差を見出すことが出来る。
- 「併行垂下文類型」はほとんど出土しない
- 文様は隆線で描かれることが多く、「対向U字交錯文類型」が主体を占める。
- 関沢類型が他地域に比べ、ほとんど出土しないことが特徴的である。

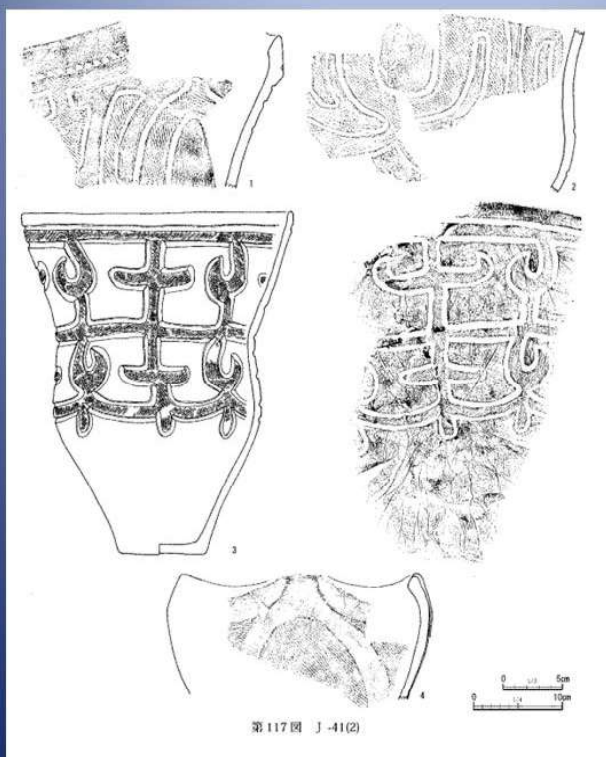
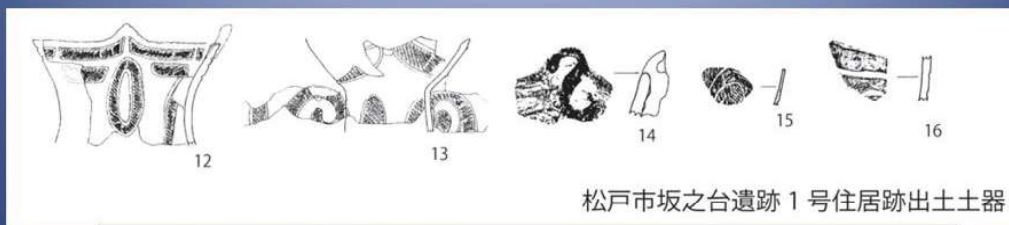
①称名寺式第1段階



①称名寺式第1段階



②称名寺式第2段階



称名寺式第2段階
(餅ヶ崎遺跡J-41号住居址)

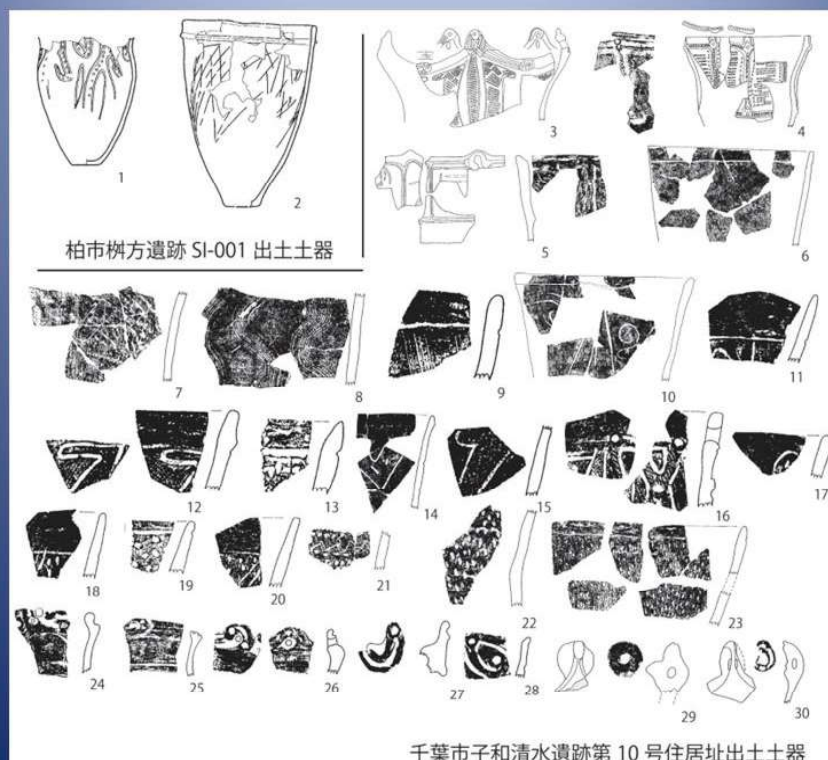
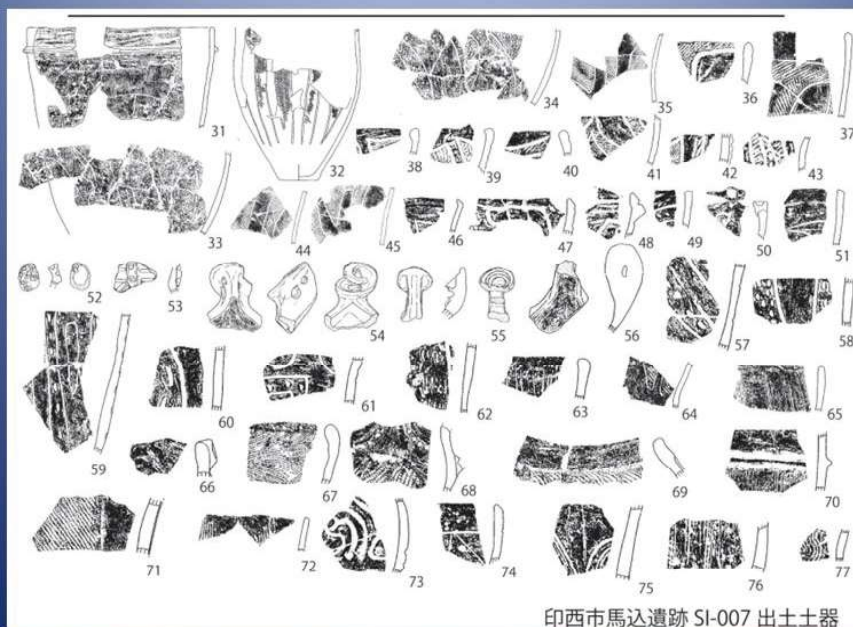
③称名寺式第3段階



④称名寺式第4段階



⑤ 称名寺式第5段階



おわりに

- 房総地域の地域性
 - 加曽利E式終末の「併行垂下文類型」がほとんど出土しない点
 - 関沢類型が少ない
 - 称名寺式成立期の段階では、加曽利E式が主体で、西日本系土器の出土はかなり限定的
 - 称名寺式第3段階に至り、加曽利E式から称名寺式に置き換わっていく様相
 - 称名寺式中段階になると加曽利E式の出土量が減少し、様相が不明瞭になる。
 - 称名寺Ⅱ式になると再び加曽利E式の個体資料が認められるようになる。東北系の土器が認められるようになる。
- 今後他地域とのかかわりも含めさらなる検討が必要
- 各地で中期末葉から後期初頭の土器の検討をさらに進めていく必要性

御清聴ありがとうございました